

二〇一九年度 置賜地区高校生

「地域と私たちの未来を考える」小論文コンテスト

優秀小論文集

二〇一九テーマ「郷土の未来と私の生き方を考える」

はじめに

私たちの住む置賜地域は人口が次第に減少していき、このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、「地方消滅」さえ懸念されます。様々な要因の一つに、高校生が進学・就職で県外に出て戻ってくる人が少ない「若者流出」があげられています。地域と私たちの未来はどうなるのか、二年後に進学・就職を迎える高校二年生にとっては、今まさに地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考えることは、どのような進路に進むにしても大切なことです。

このような趣旨から「置賜地区高校生『地域と私たちの未来を考える』第二回小論文コンテスト」を高校二年生を対象に実施いたしました。応募された生徒の皆さん、そしてご指導いただいた先生方に心から御礼申し上げます。応募総数は八十二点あり、昨年とはほぼ同じ参加で大変喜んでおります。小論文を読みますと、資料編を活用し自分の体験や知見をフルに発揮して、郷土の未来を想像し自分の生き方を展望するという趣旨に沿った小論文を書いてくれました。高校二年生の今、この小論文に取り組んだ経験はこれから先必ずどこかで役立つものと思います。

この小冊子は、審査の結果、受賞された最優秀賞一点、優秀賞四点、入選五点を収録したものです。広くお読みいただき、地域の未来を共に考えていきたいと思います。

令和元年十月十九日

公益社団法人 米沢有為会 高校生小論文コンテスト実行委員会

受賞者一覧

(応募総数 八十二点)

◇最優秀賞(一点)

山形県立米沢興譲館高等学校 二年 齋藤 千尋

◇優秀賞(四点)

米沢商工会議所会頭賞

山形県立米沢興譲館高等学校 二年 島崎 茜

学園都市推進協議会会長賞

米沢中央高等学校 二年 長澤 亜実

公益財団法人近野教育振興会理事長賞

山形県立小国高等学校 二年 舟山 未羽

米沢信用金庫理事長賞

山形県立南陽高等学校 二年 影山 南央

◇入 選(五点)

山形県立米沢商業高等学校 二年 鈴木 麻那

山形県立米沢商業高等学校 二年 石川 ひかる

山形県立南陽高等学校 二年 内谷 桃花

山形県立小国高等学校 二年 吉田 健人

山形県立長井高等学校 二年 二瓶 倭花那

※『米沢有為会々誌』第六十九号及びホームページには最優秀賞一点と優秀賞四点の小論文を紹介します。

地域の未来と私の生き方を考える

山形県立米沢興譲館高等学校 二年

齋藤 千尋

少子高齢化、人口減少。最近はこの言葉を耳にする機会が多くなったと感じる。生活していても実感する場面が少なくはない。私たちが住んでいる置賜地区も他人事ではない。このまま進んでいってしまえば「地方消滅」さえありえてしまうことだろう。こういったことを避け、地域の未来を守るために私たちには何が出来るのだろうか。

資料によると、高校や大学等の卒業や就職を迎える若者の転出超過が多いこと、高校卒業者のおよそ五割が進学や就職で県外へ出て行ってしまうことが分かる。もちろん、自分の将来のために進学等で県外へ出て行ってしまうことは仕方がないことであり、さらに言えば、県外へ出ることによって社会勉強になることもきっとあるだろう。しかし、私はそこで得た経験や知識を地元で活か

すために広めて、発展させていくことが大切ではないかと考える。そうすることで、地元にとっても学んできた若者にとっても良い状況が生まれるだろう。

私は、中学生の時に米沢市教育委員会で就職体験をさせていただいたことがある。そこで市民の方と交流させてもらう機会があり、自分が行った行動に「ありがとう、元気をもらったよ」などと言ってくださる方がいて、地元米沢のために活動できる喜びを感じることができた。このように、市民の方と交流したり、地元を今以上に知るきっかけを提供してもらうことで、興味関心が高まるのではないかと考える。そのためにも、各高等学校における取組でも紹介されているように、地域学習の展開や職場体験、インターシップなど郷土愛を育む取組を積極的に行っていくことが大切だと思う。

少し前までは一人暮らしがしたいから、都会の方に行ってみたいから、といった考えで大学は地元以外に進学をしてみたいと思っていた。しかし、周りの人に話を聞いてみると地元の魅力を再認識させられ、学びたい学問もあることから、県内での進学もよいかもしれないと思うようになった。それと同時に、自分の故郷を大切にしていきたいと感じた。将来は地方公務員となって市役所で働きたいと考えている。そこで私は、地域振興に関

するボランティアやイベントにたくさん参加し、少しでも多く地元に関することを今のうちから学ぶことができればよいと思っている。今私たちにできることは小さなことかもしれないが、培った経験を将来何らかの形で発信していきたいと思う。

私は、自分が生まれ育ったこの米沢市が大好きだ。身近に自然がたくさんあり、人も温かい。これほど豊かな町はあるだろうか。米沢市制百周年記念イメージソングとして作られた「ぼくたちのまち米沢」という曲の歌詞にもあるように、生きてゆけたったそれだけで幸せになる、こんな風に思えるように米沢市・置賜地区の未来を守り、たくさんの方が地元を誇れる町にしていきたい。そして、私と同じように考える人が少しでも増えてくれたら嬉しいと思っている。



優秀賞

米沢商工会議所会頭賞

仕事を創生することの可能性

山形県立米沢興譲館高等学校 二年

島崎 茜

少子高齢化が問題となっている現在の日本で、私の住む置賜地区も例外ではない。人口流出が年々増加していく中、どうしたら人口減少にブレーキをかけられるのだろうか。

そこで私は、仕事を創生するという対策に着目する。なぜなら、新しい雇用を創ることは、定住する人を増やすことにつながるからだ。雇用の数だけそこに暮らしが存在する。これがこれからの人口減少を食い止める鍵になるだろう。しかし、既存の職の雇用を増やしたところで、本当に人口減少を止められるだろうか。私は止められないと思う。なぜなら、現在の県内の職の充実度に満足していない若年層の転出超過が、人口減少の大きな要因となっているからだ。だから私は、新しい仕事を創生する「ベンチャー企業」にフォーカスを当てたい。

ベンチャー企業とは、新規の事業へ取り組む企業のことを指す。近年のベンチャー企業は、近代化が進む社会の影響を受け、AIなどの新しい技術を生かした事業が目立つ。その事業の中には、少子高齢化社会の解決に役立つものがある。例えば、介護ロボットや、自動走行技術、ドローンの活用など多岐にわたる。これまでの社会は、地域のニーズ全てに対応できるわけではなかった。少数派である地方社会は後回しにされていた。しかし、最新技術を使い、様々なニーズに対応可能なベンチャー企業が地方に増えれば、社会問題も解決し、雇用も生まれる。地方をイノベーションしていくことにつながるのだ。また、ベンチャー企業の業種は上位がIT、バイオ、ヘルスケアと、社会問題に対応するものばかりである。これらのことから、地方問題を解決していくにはベンチャー企業が不可欠なのである。

では、そんなベンチャー企業に対して、地方ができることは何だろうか。私は三つの方法を考える。この三つの方法は、もし私がベンチャー企業のトップだったら何をしてほしいだろうか、と考えたものだ。まず一つ目は、地方からの資金提供だ。資金は何事にも必要なものであるからだ。二つ目はウェブサイトなどによる情報提供である。どんな土地でどんな支援を行ってくれるのかを地

方側から発信すれば、企業側の負担は軽くなると思う。そして三つ目は起業しやすいコミュニケーションづくりだ。必ずしも企業は外から入ってくるだけではない。県内からの新しいベンチャー企業も重要だろう。そのために、シンポジウムを開いたり、同じ志の者同士で親睦を深めたりすれば、起業しやすい地域づくりにつながる。起業する人が増えれば、必ず雇用も増えるのだ。

新しい職業の雇用が生まれれば、若者の転出を抑えることにつながる。また、雇用が生まれたことで、そこに暮らしていくことができる。そして、ベンチャー企業を活性化させることで地方の問題を解決することにつながるだろう。仕事を創生することの可能性は無限に広がるのだ。そのためにも、地方がどうサポートしていくのかを考えていく必要がある。私たちが何年も住み続けたいと思う置賜であり続けてほしい。



私と山形県の将来を考える

米沢中央高等学校 二年

長澤 亜実

今日の山形県では、高校卒業業者のおよそ五割が進学や就職によって県外へ出ること、若者流出による県の人口減少が問題となっている。私はこの実態を身近な所で感じたことがある。それは私の家族だ。私には双子の姉がいるが、二人とも高校卒業後は関東の大学へ進学し、現在は関東の方で就職活動をしている。私の家族内で起こった人口減少はとても小さな出来事だが、これが県全体の約半分で起こっていると考えたと人口減少の深刻さが伝わってくると思う。

なぜ若者が県外へ流出してしまうのかを考えた時、私はおそらく多くの若者が抱いているであろう「都会への憧れ」が原因だと考えた。都会にはここにはない様々な美味しい食べ物や飲み物、楽しい施設などがたくさんある。若者はこれらを求めて県外へ行ってしまうのではないかと思う。

そこで私はある対策を考えた。それは「自分の将来を考える」ということだ。これは学生である私たちにとっても大切なことであるからもうやっている、対策にならないと思う人もいるかもしれない。しかし、私たちが今している「将来を考える」ことはそのほとんどが「高校卒業後の進路を考える」ということである。だが、これは私の考える「将来を考える」ではない。私の考える「将来を考える」は、進学よりもっとその先の未来を考えるとということだ。つまり、自分が将来持つであろう家族のこと、または今の自分の家族のことを考えるのだ。今生活を共にしている家族の将来を考えるのは少し面倒であり、どこか自分にとって厄介なもののように思われるが、自分の将来の家族のことを考える、となると真剣に向き合えると思う。こうして自分の将来を考えた時、厳しい現実を見ることができるよう。私は現実（例えば家賃や物価の高い都会で貯金していけるのかなど）をイメージすることができた。だから私は、「自分の将来を考える」ことが若者の県外への流出を防ぐために大切なことだと考える。

私は高校二年生になるまでは、私の姉達と同じように関東の大学へ進学しようと考えていた。しかし、今回のこの作文のようにこれからの山形県や米沢市のことを考

小国町の未来、私の生き方

山形県立小国高等学校 二年

舟山 未羽

える機会が与えられたことによって、自分の将来について考えるようになった。「私はなぜ関東にある大学へ進学したいのか」。この問いを考えた時、その理由はやはり都会への憧れだった。おそらく今までの私の中では、「都会にある観光地は楽しい。だからきつと日常生活も楽しくてキラキラしている」という概念を持っていたのではないかと思う。だが、私が姉の家に泊まりに行った時、この考えは間違っているのではないかと思い始めた。このことがきっかけとなり、「本当に都会で住むことは楽しいのか」「本当に私は関東の大学へ進学したいのか」というような疑問を持った。そして悩みに悩んだ結果、私は県内の大学へ進学して、大学卒業後は米沢市で教師として働くという前とは少し違う将来の夢を持つことができた。このことから、県外への進学を考えている人は、観光地に遊びに行くのと、そこで生活を送るのとでは全く別のものだと思わなければならないと感じた。だから私は将来教師になり、子ども達にこのことを伝え、人口減少の問題を解決できるように私なりに貢献していきたい。

私が住む置賜地域では、高校生が進学・就職で県外へ出て、戻って来る人は少なくなり「若者流出」が起きている。私は高校二年生として、今、郷土の未来を見直しながら、私自身の生き方を考えてみることにした。

資料によると、置賜地区では、二〇四五年の人口が二〇一五年と比較し三十八%も減少すると予測される。二〇一七年に、十八歳から二十四歳の転出超過が二九〇二人にも及んだことは、非常に深刻な状態であると言える。では、地元から若者を流出させないためには、どのようにすべきなのか。地元でUターンして就職し活躍する先輩達を見て、私は思うことがある。「他県で働く同級生もいる中で、なぜ地元で働くことを選んだのか?」理由は簡単だった。「地元が好き! 地元の力になりたい!」それだけだった。なぜそう思うのか。「各高等学校における多様な取組」の影響が大きいと私は考える。

私達小国高校生は、一年時に地域文化学という学習を行う。五、六名の班に分かれ、地元産やマウコギの研究や商品化、大宮子易両神社等について学んできた。講師は地元の大学の先生や地域のプロフェッショナルな方々。毎週のように町の伝統文化を学び、最終的には全校生や町民の前でプレゼンテーション（発表）を行う。こうした地域学習の展開やインターシッピング等の活動は、地元の良さを再確認し、地元に住住する遠因になっていると私は考える。これらの学習の中で、他県の事例も学んだ。島根県では、過疎化を防ぐために敢えて郡部の高校を残し、都市部の高校は統合して成功している。山形県も郡部の高校を残していかないと、若者は地域に根付かないのではないだろうか？

二年生になって、ふるさとの未来をより良くしていくために、何か行動を起こす必要があると私は考えた。そんな時、第二回全国高等学校小規模サミットを小国高校主催で行うことになった。町や母校の良さを全国に伝えるチャンスだと思い、私はコアメンバーとなって企画することにした。今ここで起こっていることは将来日本中で起こり得ること、仲間と一緒に未来を考えようというチャレンジだ。「小規模校だからこそできること」を全国の皆に考えてもらおう。交流を通して親睦を深めると共

に、各校・地域が抱えている課題について活発な意見交換を行うことができた。地域と高校が協働しアクションを起こすことは、地元の現状について考える良い機会になった。昨年は先輩達をサポートする側だったが、今年を中心となって活動したことで、自分の生き方についても深く考えることができた。サミットは三か月前から準備し、他校とも協働して企画することが多い。今年は全国から十八の高校が参加してくれた。昨年の倍の参加者を前に全体進行をするのは、私にとってかなりの勇気と努力が必要だった。

この経験を通して、自分が地元のために何をしたいのかが少しずつ見えてきた。今の地域の活動は、一つ一つが素晴らしいものだ。それをできるだけ多くの人々に伝えていきたい。そのためには、高校生の力を結集し、後輩達にも伝えていくことが大切だと考える。二年後に進学・就職が決まっている私達にとって地元のことを考えるのは、自身の将来に関わり必要不可欠だからである。今の小国町には課題が山積している。しかし、地元の未来を明るく捉え、自分の生き方に繋げていくことを意識していくことが今後の未来を拓く道だと考える。

米沢信用金庫理事長賞

地元を愛する教育を

山形県立南陽高等学校 二年

影 山 南 央

ついに日本は、「人口減少時代」と呼ばれる時代を迎えた。国立社会保障・人口問題研究所の将来推計によると、二〇五〇年には日本の総人口は一億人を下回ることが予測されている。そんな中、私の住む長井市も例に漏れず、二〇四五年には現在の人口のおよそ五分の三に減少すると予測されている。その原因は、就職や進学のために県外に出た若者が県外に留まり、地元に戻って来ないことにあると私は考える。資料二の表二「若年層の県外転入・転出者数」にもそれが顕著に現れている。地域を活発にする若い働き手の不足により、地域が衰退していき、地方消滅の可能性も否定できない。

では、若者はなぜ就職や進学のかとして県外を選ぶのか。地元から離れて一人で生活したいという自立心から生まれる考えや、地元にはない様々な文化に触れて刺激に満ちた生活を送りたいという探究心から生まれる考え

があるからだろうか。地元を離れて暮らすことで、地元にはない地域の取り組みや文化に気づき、そこからインスピレーションが湧くこともあるだろう。確かに、それらは県外に進出することの利点ではある。

しかし、問題なのは、そうして県外で多くのことを学び経験した若者が、県内に戻って来ないことである。そして、ここで見えた新たな問題は、県外で身につけた知識を自分の地元のために活用して貢献しようという意志を持つ若者が少ないということだ。だから、私は、自分の地元に着着を持つ子どもを育てるための教育を行うべきだと考える。

私の通っていた中学校では、長井市のことをよく知るために、各自決めたテーマに沿って市内の各所を巡る課外授業を行っていた。この活動で私は長井市の建物の歴史について調べ、その中で訪れた美術館で見た光景に感銘を受けた。歴史を感じさせる蔵と美術品の数々は言うまでもなく、私が最も心を奪われたのは庭である。私が訪れたのは丁度秋で、鮮やかに色づく紅葉の中で、水琴窟の澄んだ音が響く幻想的な世界に涙が出そうになった。その時、私は長井市の奥深さを知り、これを多くの人に伝えていきたいと強く感じた。

私は将来、保育や教育に関わる仕事に就きたいと考え

ている。そのために、一度県外に出て、外から長井市を見つめながら保育や教育について学びたい。そして、学んだことを持ち帰って、私が中学校の頃に見たような長井の魅力を子どもたちに伝えていきたい。もし私が将来長井市で教育者として働くことができたなら、長井市の美しい景観を守るための取り組みがしたい。例えば、地域の方々に教えていただきながら、市の花であるアヤメの咲く六月にクラス全員でアヤメの手入れをしたり、長井市の財産である水を綺麗に保つために毎週末に水路の掃除をするような活動をしようと思う。そうして、実際に住んでいても気づかない魅力や、住んでいるからこそ見落としてしまう魅力に気づかせてあげたい。そうすれば、魅力あふれる地元貢献したいと思う人がきつと増える」と私は思っている。

このような夢を抱く今、まずは自分がより多くの地元の魅力を見つけるために市内のあらゆる所に目を向け、市の様々な行事に率先して参加していきたい。それが地元の未来を輝かせる第一歩だと思うから。



審 査 講 評

第二回小論文コンテストに、多くの意欲的な小論文作品を寄せていただいたことを、大変に意義深く感じました。郷土の現状・今後・未来における課題の解決策を考えることは、高校二年生にとって相当難しいものであることと思います。その中でも、自分の体験や知見を土台として、近きより模索して実践を次第に広げていくことが重要です。

コンテストへの応募を契機に、地域が抱える問題状況について初めて知り、地域の未来や自らの今後の生き方について初めて考えたと述べる作品が多くありました。正面から向き合って、真面目に考えたものばかりで、頼もしい限りです。この応募を機に生じた問題意識を今後とも大事に育み深めて、自らの今後に生かして取り組み続けられることを期待します。

応募作品の審査に際しては、応募者の熱意を受け止めながら慎重に当たりました。小論文として、書き手の顔が見えるか、根拠を持って述べているか、紙数の少ない中で羅列的ではなく焦点化して起承転結ある論を深く展開しているか、論旨が読み手へ伝わるか等、審査委員八名の多様な視点からの討議を経ながら、審査を行いました。

なお、書き手の豊かな創造性にも関わらず、誤字・脱字、主語・述語の乱れなど、提出前に読み返す習慣があれば防げるものや、文字が薄く、また小さい文字で書かれて読みにくいものも見られ、他人が読むものと考えれば改善できるものも少なからずあったことを、念のため記録しておきます。

むすびに、真摯に取り組んでいた応募者に敬意を表し、今後のご活躍ご精進をお祈りします。

置賜地区高校生「地域と私たちの未来を考える」小論文コンテスト

募集要項

一、趣 旨

少子高齢化と共に近年日本の人口が減少する中、私たちの住む置賜地域も人口が確実に減少しています。このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、「地方消滅」さえ懸念されます。様々な要因の一つに、高校生が進学・就職で県外に出て戻ってくる人が少ない「若者流出」があげられています。地域と私たちの未来はどうなるのか、二年後に進学・就職を迎える皆さんにとって、今まさに地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考えることは、どのような進路に進むにしても大切なことです。本コンテストは高校生の皆さんが地域と自分の未来を考える契機になることを願い実施するものです。

「郷土の未来と私の生き方を考える」

置賜地区高等学校二年生

募集要項の資料編を参考にして、テーマについての各自の考えを一二〇〇〜一四〇〇字にまとめてください。（使用鉛筆はHB又はB）

各高等学校の担当者まで

各学校から主催者への提出締切 九月十日（火）必着

最優秀賞一点 優秀賞四点 入選五点 及び副賞

十月下旬の予定 ホテルモントビュー米沢（米沢市門東町）

米沢有為会会長 大滝則忠（元国立国会図書館長）

公益社団法人米沢有為会 学園都市推進協議会

置賜総合開発協議会 置賜地区高等学校長会 米沢商工会議所 米沢・置賜経済人クラブ

米沢新聞社 公益財団法人近野教育振興会 NCV 米沢信用金庫

- 二、19テーマ
- 三、対象者
- 四、募集小論文
- 五、応募先
- 六、応募締切
- 七、表彰
- 八、表彰式
- 九、審査委員長
- 十、主催・共催
- 十一、後援・協賛

21 歳	425	833	△408
22 歳	661	1,154	△493
23 歳	768	1,322	△554
24 歳	626	790	△164
計	3,803	6,705	△2,902

<出典 山形県統計企画課>

18～24歳の転出超過は2,902人となり、高校や大学等の卒業や就職を迎える若者の転出超過が多く、県人口減少の大きな要因になっています。

資料3 山形県の高校卒業者の県外への進学就職状況

	卒業者数	大学等進学者 数（うち県外）	就職者数 （うち県外）	計 （うち県外）	県外の 割合
2017年度 (平成29年度)	10,073 名	4,566 名 (3,301 名)	2,891 名 (641 名)	7,457 名 (3,942 名)	52.9 %
2018年度 (平成30年度)	9,943 名	4,501 名 (3,227 名)	2,994 名 (708 名)	7,495 名 (3,935 名)	52.5 %

<出典 山形県統計企画課>

高校卒業者のおよそ5割が進学就職で県外に出ていきます。

人口減少の一因である「若者流出」の状況を統計データで見てきましたが、これに歯止めをかけるさまざまな対策が講じられています。最後に、それらの取組を紹介しましょう。

資料4 置賜圏域の将来像…行政施策「置賜定住自立圏共生ビジョン」の取組例

置賜圏域は、歴史的背景や地理的要因から、行政区域を越えて生活圏を共有し、経済、教育、文化などの面で深いつながりを持ちながら発展してきた。これまで圏域内の各市町は、それぞれが活力ある地域づくりを実現するため、様々な取組をしてきたが、人口減少や高齢化は急速に進んでおり、今後もこうした傾向は続くものと予測される。この状況下で、地域の活性化を図り持続的に発展していくためには、単独自治体での事業展開には限界があることから、広域で連携し、効果的、効率的に行政運営を行うことが必要である。こうした認識のもと、置賜3市5町は、それぞれの独自性を維持しながら、地域の魅力をしっかりと磨き、その上で様々な分野において連携を深めつつ、住民の暮らしに必要な諸機能を圏域全体として確保することで、住民が暮らしやすい、活力ある圏域を創造し、共存共栄を目指す取組を行う。それが「置賜定住自立圏」というもので、米沢市が「中心市」、2市5町が構成市町となり協定を締結し、共生ビジョンに基づいて連携事業を推進する。具体的な取組として①生活機能の強化（医療、福祉、教育、産業振興、環境、水道、消防・防災）、②結びつきやネットワークの強化（交通、移住・定住・交流）、③圏域マネジメント能力の強化（職員等の交流）の3つの政策分野で取組を行う。

<米沢市「広報よねざわ」2019.5.1 より>

資料5 若者定着・若者回帰に向けた県内の諸取組の紹介

事例1 山形県と首都圏大学との UI ターン就職促進協定 17 大学と協定を結ぶ

山形県では、山形県内の企業情報等の提供、大学内での就職ガイダンスの開催等について、大学等と連携して取り組むことにより、Uターン・Iターン就職の一層の促進をはかり、県内企業の人材を確保することを目的として実施している。

＜協定締結大学＞ 東海大学、神奈川大学、専修大学、大東文化大学、日本大学、明治大学、国土館大学、駒澤大学、東洋大学、文教大学、立教大学、帝京大学、帝京大学短期大学、明治学院大学、立正大学、拓殖大学、立命館大学

＜出典 山形県雇用対策課＞

事例2 山形県若者定着奨学金返還支援事業の実施

大学等へ在学の方又は進学予定の方を対象として、県と県内市町村が連携して、奨学金の返還を支援する事業。米沢有為会も市町村枠で実施。平成27年度から平成31年度までの5か年事業（現時点で）。要件は日本学生支援機構の第一種奨学金（無利子）の貸与を受けている方又は受ける予定の方、米沢有為会の奨学生。大学等を卒業後6か月以内に、山形県内に居住かつ就業し、山形県内の助成対象分野に通算して3年間就業した後、申請し、助成対象者に認定された時点で返還金の一部の助成を受けることができる。

＜出典 山形県産業政策課＞

事例3 米沢三大学〈山形大学工学部・米沢栄養大学・米沢女子短期大学〉保護者対象の「米沢地域産業見学会」の実施

米沢商工会議所主催。保護者の方に米沢の産業・企業を知ってもらい、この地で生活する不安を払拭してもらうことによって、大学卒業後地元に残り就職する選択を後押ししてもらうことを意図した企画。昨年度は23名参加。今年度も実施予定。

事例4 各高等学校における多様な取組

各高等学校においては地域学習の展開、職場見学・体験、インターンシップの実施など郷土愛を育むとともに、社会的自立に向けた勤労観・職業観の育成を目指した多様な特色ある取組が行われている。

事例5 高校生就職希望者や就職者に対する地元への人材確保・定着の諸取組

置賜地区雇用対策協議会（行政機関〔米沢市・南陽市・高畠町・川西町〕やハローワーク等との緊密な連携のもとに、若者の雇用安定を目指す団体）が、模擬面接会（高校3年生対象）や大規模な就職説明会（高校2年生520名参加、出展企業60社）、新規卒卒者ビジネスマナー講習会や新入社員フォローアップセミナーなどの諸事業を実施。求人・求職者の両面からサポートし、雇用の確保と定着、就職支援に取り組んでいる。また、高校1年生を対象とした職業体験会の開催など、進学者を含め地元にいるうちに地元企業を知ってもらう事業についても展開している（昨年度は2校計264名の高校生を対象に実施）。

二〇一九年度置賜地区高校生

「地域と私たちの未来を考える」小論文コンテスト

優秀小論文集

発行日 二〇一九年十月二十六日

発行者 公益社団法人米沢有為会

会長 大 滝 則 忠

〒八二〇〇四 東京都調布市入間町一三六

東京興譲館内

電話・FAX 〇三三三三〇九一三三〇二

ホームページ <http://www.yonezawa-yuukai.org/>